

## かんしょ実生におけるペーパーポット栽培試験

山川 理・坂本 敏

(九州農業試験場)

かんしょ栽培の省力化を目的とする種子播栽培で多収をあげるためには、発芽歩合や低温伸長性の向上による苗立本数の確保と初期生育の促進が問題になる。本試験では、ペーパーポットを利用してこれらの問題の解決を計るとともに、種子播での収量増加がどの程度可能であるか検討する。

## 1. 試験方法

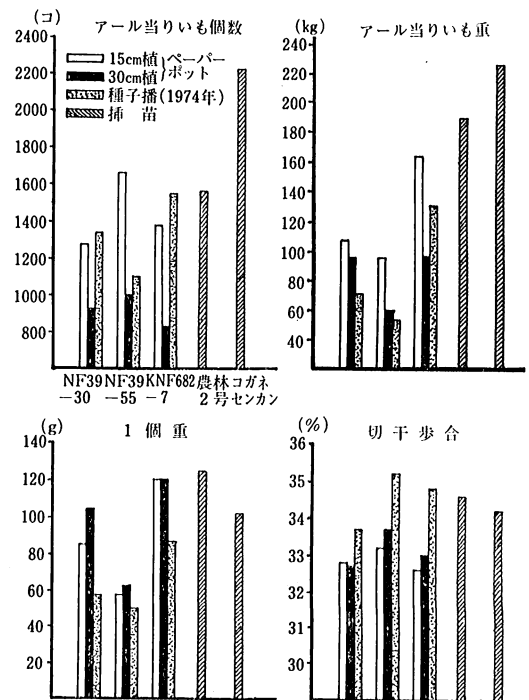
種子播用材料として、1973年に自然交配した集団から3系統の種子を用いた。また比較として2品種を挿苗した。栽植法は、ペーパーポットでは畦巾70cm、株間は15・30cmとし、挿苗では株間30cmとした。ペーパーポットは日本甜菜製糖の規格3号(3×13.5cm)を使用し、試験区は1区4.2㎡の5回反復とした。ペーパーポットは温室に置き、前日に硫酸処理した種子を1976年4月19日に播種し、5月12日に定植した。比較は6月5日に挿苗し、いずれも10月8日に採収調査を行った。

## 2. 試験結果および考察

ペーパーポットでの発芽歩合は58.7%で、前年の種子播より低く、その後も枯死個体が多かった。定植時の苗は本葉が約5枚で、根は8cm位であった。活着やその後の生育は良好で、植付50日目の茎長も長く、種子播の3倍位(約12cm)であった。このことから、ペーパーポットの利用により苗立本数の確保、初期生育の促進は一応達成されたと見なされる。次に収量形質の調査成績を第1図に示すが、種子播は前年のデータの補正値を用いた。いも個数では、ペーパーポットの効果が系統で異なり、発芽歩合や初期生育の悪いNF39-55では効果が大きい15cm植と30cm植ではアール当たりで前者が、株当たりで後者が多い。1個重では、すべてペーパーポットが種子播より大きい。NF39-55の効果は小さく、肥大能力に限度があると思われる。15cm植と30cm植とは大差はないがNF39-30では後者がやや大きい。いも重では、全系統ともペーパーポットの効果は大きく、30cm植でも種子播にまさる系統もある。15cm植と30cm植では前者が多収

であるが、1個重の密度効果の大きいNF39-30ではその差が小さい。切干歩合では、1個重の違いにより、種子播が数%高い。15cm植と30cm植では差はないものと思われる。

以上要するに、ペーパーポットの効果は形質や系統により若干異なり、種子播栽培で発芽歩合の高い系統はいも個数が減少することもある。1個重は初期生育の促進のためどの系統でも増大し、この効果はいも個数の減少を補うほど大きく、従っていも重が増加するものと考えられる。また栽植密度の効果は1個重ではほとんどないが、いも個数の減少が著しいために30cm植のいも重も減少すると思われる。



第1図 栽培法と収量形質との関係